

西洋日本学の水戸藩・水戸学研究

西洋日本学者の中で英国の歴史家であるクレメント氏が水戸藩・水戸学の成立と発展の研究を始めた。同氏は水戸市の高等学校で英語講師として勤めていた明治中期に水戸の歴史に興味を持つようになった。彼の学生に水戸藩諸公のテーマについて文章を書かせて、その論文を根拠として自分の研究をした①。無論、クレメント氏の研究は厳密な意味において、学問的検討といえないが、しかし特に彼の水戸藩史・水戸学の文献資料訳文(↓①・⑬・⑳)は、水戸藩の故事・思想を早い時代に西洋の国々に知らせたのである。それに、今日でも日本語が分からない欧米の読者にとって大切な文献として残っている。

クレメント氏以後には、水戸史研究が進められないようになった。当時の西洋日本学は創立期を迎えて、研究しなければならぬ分野は数え切れなかった。

文学博士

クラウス・クラハト

結局、一九三七年にライプツヒ大学の日本学講座を初めたホルスト・ハミチ氏が、精密な検討の後、その二年後に、水戸学の成立と発展について『Die Mito-Schule』という論文を出して、西洋の水戸学研究を興した。同氏は義公より烈公への道を描き、それに水戸学の根本的テキストを色々ドイツ語に訳した③。欧米における日本近世思想史研究がまだまだ進んでいなかった当時に、この研究書は西洋日本学の水戸学研究に対して深い影響を与えた。更に二年後、ハミチ氏が『新論』について論文を書き、この伯民先生の本を西洋の学界に知らせた④。

周知のように、アメリカ合衆国の日本学は戦後の数年間に目ざましく進んだ。一九五〇年代に、ニューヨーク・コロムビア大学のウェップ氏の論文が出て来た。同氏は前期水戸学の発展、特に『大日本史』編纂事業に興味を持った⑤。残念

ながら、根本的資料の訳文を含んでいるウェッブ氏の博士論文⑤は本として発行されず、複写だけで専門学者しか読んでいないのである。クレメント氏とハミチ氏の研究に続いて、ウェッブ氏がその研究を通じて前期的発展の知識を弘めた。一九六〇年代、徳川斉昭に対する興味が盛になった。まずハミチ氏の弟子であるオーピッツ氏が藤田東湖の『常陸帯』を根拠として、水戸藩の天保改革のテーマについて博士論文を出した②⑥。オーピッツ氏は、その際ドイツ語訳した『常陸帯』をいつか全部発表するつもりであると言っている。一九六八年、コロムビア大学のラムベルティ氏が、政治家としての烈公について徹底的な伝記研究書を書いた②⑩。あいにく、今まで複写だけで本としては出されていない。ハーヴァード大学のトットマン氏も、烈公と幕府の關係問題について論文を書いた。②⑫。藤田東湖を精密に研究し初めた西洋学者は、一九六四年にミシガン大学を卒業したチャンク氏である。同氏の博士論文②⑬は六年後、新しいタイトルで本②⑭として出て来た。その中心にあるテーマは藤田東湖の外国観である。現在、チャンク氏はフロリダ大学の教授である。

一九七〇年、ハルチューニアン氏(シカゴ大学教授)が遠山茂樹氏・本山幸彦氏・上山春平氏などの水戸学諸説を顧みて——後期水戸学の政治思想の政治的・思想的役割について『Toward Restoration』という本②⑮に精密に触れてい

る。同氏は初めて日本の学者の議論も少しでも考慮に入れた学者である。今、会沢正志齋の研究を準備している所であると聞いている。

近年、アメリカ合衆国に前期水戸学についても二つの論文が発表された。一つは、ニューヨークのセント・ジョン大学のクー氏が博士論文として書いた朱舜水の伝記研究で②⑰(元の茨城大学の石原氏の下で準備せられた)、もう一つはオーストラリアのキャンベラ大学のチニング氏の朱舜水の研究②⑱である。

西ドイツでも、近年、水戸学の研究が進められている。一九六六年、フリーゼ氏(元ニューレンベルグ・エルランゲン大学教授)が『朱舜水と日本』という論文②⑲を書き、それ前に述べたオーピッツ氏(チュービンゲン大学助教授)が一九七一年に政治家としての水戸光圀について論文②⑳を現わした。筆者は、一九七一年から一九七三年までハミチ先生の下で藤田東湖の『弘道館記述義』の研究②㉑をしてそのテキストをドイツ語訳し、ついで『正名論』の思想的意義についての論文を出し②㉒、それに後期水戸学の政治思想における弁証法的思惟というテーマに触れた②⑩。会沢正志齋の、『退食間話』のドイツ語訳を今年度中に出すつもりである。去年永眠したヘーニツ氏(元マルブルグ大学教授)が、その死のしばらく前に、『大日本史』のある問題点について文章②㉓を書いた。

現在、フランクフルト市のフォルケル・スタンツェル氏が『新論』の全訳をしている所である。『新論』の英訳書は同時にアメリカ合衆国で準備せられている所であると耳にしている。

(一) 一般研究書

- ① Ernest Wilson Clement: The Tokugawa Princes of Mito, Transactions of the Asiatic Society of Japan, Tokyo, 第一八巻(1889), 一一一—一四頁(訳文『徳楽園記』)。
- ② 同氏: The Mito Civil War, Transactions of the Asiatic Society of Japan, Tokyo, 第十九巻(1891), 三九三—四一八頁。
- ③ Horst Hammitzsch: Die Mito-Schule und ihre programmatischen Schriften Bairi Sensei Hiin, Kodokanki, Kodokan gakusoku und Seiki no uta in Uebersetzung. Ein Beitrag zur Geistesgeschichte der Tokugawa-Zeit, Mitteilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Tokyo, 第二三—二四(1939), 九一頁(訳文『梅里先生碑陰銘』・『弘道館記』・『弘道館學則』・『正氣歌』)。
- ④ Herrschel F. Webb: The Mito Theory of the State, Researches in the Social Sciences on Japan, 第四卷(1957), 三三—五三頁。
- ⑤ 同氏: The Thought and Work of the Early Mito School, PhD thesis, Columbia University 1958, 一—二九四頁(訳文『大日本史』・『大日本史論贊』)。
- ⑥ Ryūsaku Tsunoda, William Theodore de Bary, Donald Keene (comp.): Sources of Japanese Tradition (Records of Civilization, Sources and Studies: Introduction to Oriental Civilizations), New York & London 1958, 三二—三三頁(訳文『大日本史序』)。
- ⑦ David Magarey Earl: Emperor and Nation in Japan. Political Thinkers of the Tokugawa Period, Seattle 1964, 八二—一〇六頁。
- ⑧ Herrschel F. Webb: The Development of an Orthodox Attitude Toward the Imperial Institution, Marius Jansen(ed.): Changing Attitudes Toward Modernization, Princeton 1965, 一六二—一九一頁。
- ⑨ Harry D. Harootunian: Toward Restoration. The Growth of Political Consciousness in Tokugawa Japan (Publications of the Center for Japanese and Korean Studies), Berkeley-Los Angeles-London 1970。
- ⑩ Klaus Kracht: Antimodernismus als Wegbereiter der Moderne. Einige Anmerkungen zur Dialektik feudalen

istischen Reformdenkens im Japan der ausgehenden Tokugawa-Zeit, Bochumer Jahrbuch zur Ostasienforschung, 第一卷 (1978), 二八五—二二七頁 (訳文『水戸史学会「創立趣意書」・『水戸学の道統』現代の正学—水戸学を興へし邦(こくに)』)。

(二) 徳川光圀

⑳ Ernest Wilson Clement: Instructions of a Mito Prince to His Retainers, Transactions of the Asiatic Society of Japan, Tôkyô, 第二十六卷 (1896) 一一五—一五三頁 (訳文『義公命令』)。

㉑ Fritz Opitz: Tokugawa Mitsukuni. Ein Staatsmann der frühen Edo-Zeit, Asien. Tradition und Fortschritt. Festschrift für Horst Hammitzsch zu seinem 60. Geburtstag, Herausgegeben von Lydia Brüll und Ulrich Kemper, Wiesbaden 1971, 四五八—四六七。

→①・②・③

(三) 朱舜水

㉒ Ernest Wilson Clement: Chinese Refugees of the Seventeenth Century in Mito, Transactions of the Asiatic Society of Japan, Tôkyô, 第二十四卷 (1896), 一一—四〇 (訳文

『補公之賛』)。

㉓ Arthur Hummel (ed.): Eminent Chinese of the Ching-Period (1644-1912), Washington 1943/1944, 一七九—一八〇頁。

㉔ Carsun Chang: The Development of Neoconfucian Thought, 2 vols., New York 1957/1962, 一九九—二一五頁。

㉕ Heinz Friese: Chu Shun-shui (1600-1682) und Japan, Nachrichten der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens, Tôkyô und Hamburg, 第二十九卷 (1966), 三三—五五頁。

㉖ Helen Pui-king Ku: Chu Shun-shui. His Life and Influence, Ph.D. thesis, St. John's University 1971, 一八七頁。

㉗ Julia Ching: Chu Shun-shui, 1600-82. A Chinese Confusian Scholar in Tokugawa Japan, Monumenta Nipponica, Tôkyô, 第二〇卷 (1975), 一七—二一九頁。

(四) 大日本史

㉘ Horst Hammitzsch: Der konfuzianische Einfluß auf die Geschichtsschreibung Japans, Saeculum, 第二卷 (1952), 五五—六—七〇頁。

㉙ Herschel F. Webb: What is the Dai Nihon Shi? Journal

of Asian Studies, 第十九卷 (1960) 一三五—一四九頁。

㉚ Wolf Haensch: Bemerkungen zum Dai nihon shi, Oriens Extremus, 第二十四卷 (1977), 二九七—三〇六頁。

→②・⑤・⑥

(五) 藤田龍谷

㉛ Klaus Kracht: "Name,"(mei)und "Anteil,"(bun) im politischen Denken der Späten Mito-Schule. Das Seimeiron des Fujita Yûkoku, Oriens Extremus, 第二十三卷 (1976), 八—一一〇頁 (訳文『正史雜』)。

→②・③

(六) 会沢正統斎

㉜ Ernest Wilson Clement: The Mito Samurai and British Sailors in 1824, Transactions of the Asiatic Society of Japan, Tôkyô, 第二十三卷 (1905), 八三—一一一頁 (訳文『聖徳開教』)。

㉝ Horst Hammitzsch: Aizawa Seishisai (1782-1863) und sein Werk Shirron, Monumenta Nipponica, Tôkyô, 第二卷 (1941), 六—一四頁。

→②・③・⑤

(七) 藤田東湖

㉞ Richard Taiwon Chang: Fujita Toku and Sakuma Shôzai Bakumatsu Intellectuals and the West, Ph.D. thesis, University of Michigan 1964, 四—一六七頁。

㉟ Fritz Opitz: Die Lehnreformen des Tokugawa Nariaki nach dem "Hitachi-Obi," des Fujita Toku. Ein Beitrag zur Lehngeschichte der Tokugawa-Zeit, Inauguraldissertation zur Erlangung des Doktorgrades an der Philosophischen Fakultät der Ludwig-Maximilians-Universität zu München, Sapporo 1965, 六九頁 (訳文『東湖雜』)。

㊱ Richard Taiwon Chang: Fujita Toku's Image of the West, Journal of Asian History, 第二卷 (1968), 一三〇—一四〇頁。

㊲ 同氏: From Prejudice to Tolerance. A Study of the Japanese Image of the West, 1826-1864 (Monumenta Nipponica Monograph), Tôkyô 1970, 一一—六七頁。

㊳ Klaus Kracht: Das Kodôkanki-jûsugi des Fujita Toku (1806-1855). Ein Beitrag zum politischen Denken der Späten Mito-Schule (Studien zur Japanologie 12), Wiesbaden 1975, 十—二二三頁 (訳文『弘道館記念義』全・

『回天録』等)。

→⑤・⑩

(八) 徳川斉昭

③ Horst Hammitzsch: Kodokwanki, 明治記念学会紀要、第五二号(1939) 一一一一—一九(訳文『弘道館記』)。

④ Matthew V. Lambert: A Political Study of Tokugawa Nariaki of Mito (1800-1860), PhD thesis, Columbia University 1968, 三三六頁(訳文『弘道館記』等)。

⑤ Conrad Totman: Political Reconciliation in the Tokugawa Bakufu. Abe Masahiro and Tokugawa Nariaki, 1844-1852, Personality in Japanese History, ed. by Albert M. Craig and Donald H. Shively, Berkeley-Los Angeles-London 1970, 一八〇—二〇八頁。

⑥ Matthew V. Lambert: Tokugawa Nariaki and the Japanese Imperial Institution, Harvard Journal of Asiatic Studies, 第三二卷(1972), 九七一—一二三頁。
→①・②・③

(追加) 日本の学者の英文研究書

⑦ Katō Genchi, Ono Minoru, Richard Ponsonby-Fane: The Three Versions of the Kodokwanki or Kodokwan Record,

ed. by The Meiji Japan Society, Tokyo 1937, 三三頁(訳文『弘道館記』)。

⑧ Motoyama Yukihiko: The Political Thought of the Late Mito School, The Philosophical Studies of Japan, 第一一巻(1975), 九五—一一九。(西ドイツ・ルール大学助教授)

(補記) クラウス・クラハト博士について

クラウス・クラハト博士は西ドイツ中部のミュンヘン大学の生れで、現在ポツムのルドル夫大学の助教授として、東亜研究所(日本史学科)に属し、ハミツチ教授のもとで日本学を研究中の若き熱心な学者である。昨年五月にはじめて書簡をいただいたが、それは正確な日本語で、一九七三年「藤田東湖の弘道館記述義—後期水戸学の政治思想について」の論文で博士号を得、(この論文は後に贈られたが、二百二十余頁に及ぶ詳細で、かつ該博な史料にもとづく研究論文である)その後「藤田幽谷の正名論について」(後期心学の道話について)等の論文を執筆したが、七月から四ヶ月間日本に留学することになったので、その間是非水戸を訪問したい旨記し

てあった。

私は敬服しながらも、会話が通ずるかどうか心配しながら、その日を鶴首していたところ、十月十三日に拙宅へ来訪された博士は、上手な日本語で、しかも極めていいねいに挨拶を述べられたのには安心もし、一層敬意を深めた。畳の座敷で会談すること約二時間半、主として水戸学に関する大小の問題であったが、博士は、終戦前に来日して水戸学の研究を積まれたハミツチ教授の薫陶を受けたためであらう、日本では現在でも水戸学が高く評価されて研究も盛んであると信じて来日されたやうである。それだけに、中央の学者が、水戸学を「封建教学」として批判して居ることに満足しえないものがあつたやうに見受けられた。私は「水戸史学」の既刊分を贈呈し、博士の研究に最も関係深い弘道館を案内したが、正門のたたまひや館内の姿を見ては嘆声を発して喜ばれた。私もまた一見旧知のやうな親愛の情を感じ、夕食を共にして水戸駅で別れた。

帰国されてからも数回にわたって文通を重ね、また、学位論文や、「正名論について」の研究物を贈られたが、あるときは近代化といふ問題についての御意見を述べられ、「日本の近世末までの道を、ヨーロッパの近代化に較べて考察するよりも、日本の場合は、世界的オルターナティブ(選択)として考えた方がよいではないかと思ふ」と述べられたこと

など、日本の学界への親切的な忠告として玩味すべきことであらう。博士はヨーロッパの近代化を内在的な精神を中心に考察して居られるが、日本に関しても、同様な着眼によって「日本近世政治思想史研究」の著述を目標として居られる模様である。

なほ、博士は「水戸史学」が研究上大変役に立ったと言はれ、西洋の国々においても水戸学の研究が、日本思想史研究の中では比較的多いことを「水戸史学」の読者にお知らせしたいと言って、苦心作成されたのがこの「西洋日本学の水戸藩・水戸学研究」といふ論文目録である。

ここに博士の研究課題を紹介し、その完成をお祈りするとともに、御好意に感謝の意を表しつつここに掲載した次第である。

(名越時正)